



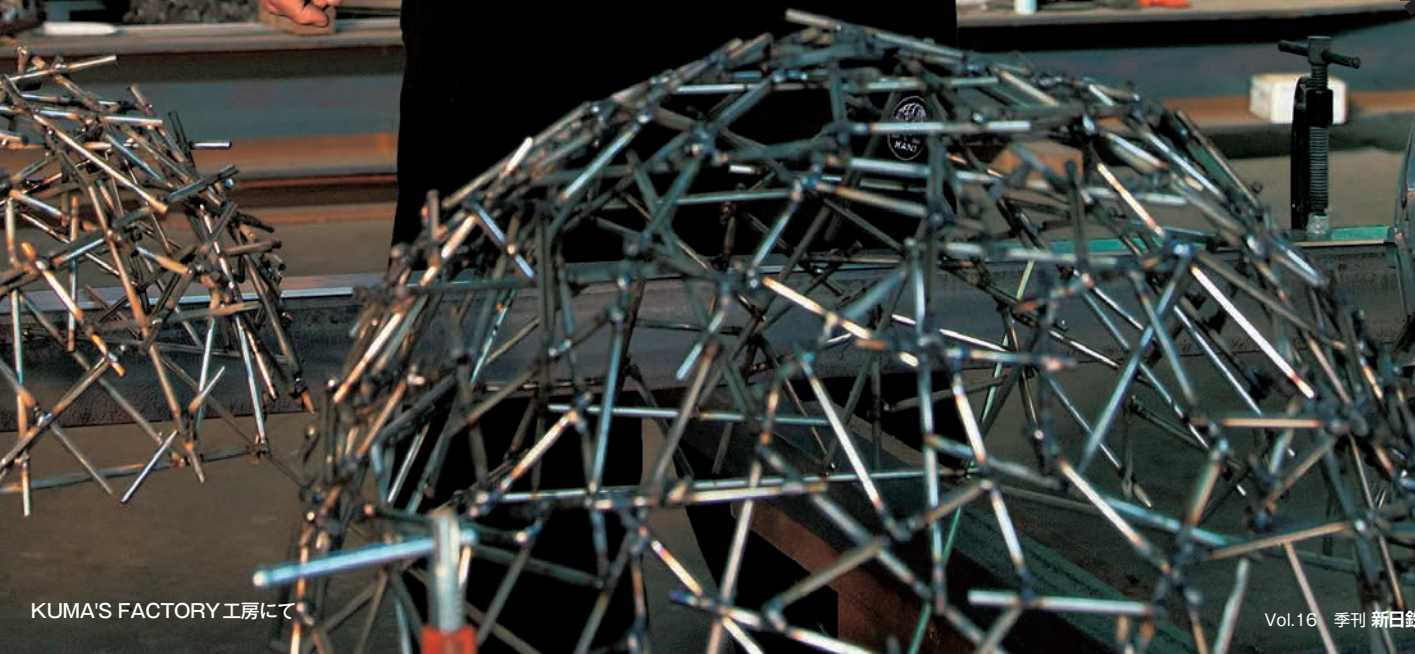
12 settembre - 11 ottobre 2002

medima
Fondazione Medima



ゲージツ家 篠原勝之氏

溶接は気分を直接表現する道具。
だから面白いし、好きなんだ。



溶接と出会ったのは結構遅くて、厄年が終わった43歳くらいだったな。そのときよくTVに出てたんだけど、オレすごく飽きっぽい性格だからさ、そろそろやめてえなって思ってたんだよ(笑)。

そんなある日、スタジオがあった新宿から当時住んでいた大久保まで歩いて帰る途中、ビルの解体現場が目にとまったんだ。そのころバブルでさ、どんどん街が新しく生まれ変わっていた。オレは食えないとき解体の仕事もやっていたから、ちよつと興味本位で現場をのぞいたんだ。そして、職人のおじさんが、コンクリートから剥き出しになった鉄筋を溶断機で細かく切ってたんだ。その様子に心が震えたんだ。都会ってコンクリートで隠蔽されているけど、一皮むけば鋼鉄の都市だ。鉄ってすごいなと思った。

当時は着流しの袂に1万円くらいは入っていたから、そのまま道具屋に駆け込んでホコリをかぶった溶接機を買ったんだ。もちろん値切ってた(笑)。そいつをアパートの台所に持ち込んで、乗っていた自転車を細かくぶった切つてから、一晩中溶接した。そして明け方、気が付いたら一つの作品になっていたんだ(笑)。それからだよ、鉄のゲージツ家だって名乗り始めたのは。

溶接って、オレの気分を直接表現するための道具なんだ。気持ちとつながっている。彫刻刀や絵筆と同じ。だから面白いし、好きなんだ。この歳になって毎日溶接で遊んでばかりで、こりゃ駄目だなんて思いながらも(笑)、こんなにワクワクすることはない。溶接に出会うために、オレは40年以上もうろうろしていたんじゃないのかなって、そう思ったよ。

スクラップ・アンド・ビルドの時代、さまざまな役目を終えた鉄が、次々と名もないスクラップになっていく。それを拾ってきて、溶接でコ



ラージュして新しく意味や価値を生み出すわけだ。あのころは仲のいいスクラップ業者の工場でクレーンに乗せてもらい、「おつ、いい表情の鉄が来たな」と思ったら持ち帰っていた。そうやってスクラップを見ていると、日本の経済も見えてくるから不思議なんだな。

溶接は四国の小さな造船所のおばちゃんたちに習ったんだ。ふだんはミカン農家なんだけど、めっちゃくちや腕のいい溶接職人でもあって、さっきまでミカンもいであつた手で完璧な三次曲面をつくっていくんだよ(笑)。いや、日本人の技術力はすごいな。

鉄はオレの根底にある。鉄の街・室蘭で育ったし、親父も製鉄所に勤めていた。若い頃はそんな鉄がなんだか偉そうで、威張っている感じがして、嫌いだっただ(笑)。まるで親父みたいだろう？でも、やっぱりオレの原風景なんだ。厄年を過ぎて鉄や溶接に惹かれていったのも、必然だったと思う。

今は小説も書くし、版画も彫る。いろんなことをやってるけど、ただやりたいと思ったことをやるだけなんだ。自分が面白いって思えることが大事なんだ。ジジイになったけど、まだまだ気力はある。鉄を使って溶接して、また何か面白いことがしたいと思ってるよ。(談)

篠原勝之(しのはら・かつゆき)

1942年北海道札幌市に生まれ、室蘭市で育つ。愛称は「クマさん」。グラフィックデザイナー、画家、絵本作家を経て、73年唐十郎の状況劇場に参加しポスターや舞台美術を手がける。81年エッセイ「人生はデューモンド」(角川文庫)で注目を集める。86年鉄を使った溶接オブジェを制作し「鉄のゲージツ家」を宣言。現在まで精力的に作品をつくり続けている。2015年小説「骨風」(文藝春秋)で第43回泉鏡花文学賞を受賞。